

#####  
## 書評 ##  
#####

一 老革命家の

自叙伝の試み

本書の著者、板野勝次は、一九〇三年一月生まれの老革命運動家である。岡山に生まれ、その地で米騒動を体験する。一九二五年には戦前の代表的左翼労働組合である日本労働組合評議会の創立に参加し、中央委員となる。翌年日本共産党に入党。そして一九二八年の三・一五共産党大弾圧によって検挙され、懲役八年に処せられる。本書は、米騒動から三・一五事件までの間に著者のかかわったさまざまな運動や争議のエピソード、革命家群像などがつづられている自伝的戦前日本革命運動史とも言つべきものである。

次に本書のもつ、いくつかの特徴を指摘しておこう。

第一に、著者は、本書を書くにあたって、きわめて精力的に資料の収集と発掘を行ない、それを本書の記述に生かしていることが、銘記されねばならない。革命運動史上著名な事件は言うに及ばず、あまり知られてはいない著者のかかわった争議や運動についても、極力資料の収集が行なわれている。しかも、現存している関係者の多くに手紙を出し、自分の記憶だけでなく相手の記憶によっても史実を確かめようとする努力がはらわれている。この入念な作業の結果、数十年以前の、多

忙な活動の日々が、かなり正確に再現されているように思われる。また、主観的になりやすい自己の活動についても、客観的に見ることをかなり可能としているようである。

これは、他の社会運動家の自伝とは異なった本書の特徴と言つてよいだろう。自伝とか回想録と呼ばれるものの多くは、しばしば著者の記憶にのみその多くを依拠し、結果として記憶間違いによる記述の誤りが散見されるものである。本書は、このおちいりやすい欠

『嵐に耐えた歲月』

板野勝次著

新日本出版社

二七〇〇円

点から、のがれることになり成功しているよつである。

しかしながら、この特徴が、同時に、その裏腹の関係として、記述がやや平板に流れる結果を呼んでしまったことはいなめない。著者がさまざまな争議や運動にかかわった際、著者が何をどう考えたかの叙述は簡潔にすぎている。また、活動中での運動家同士の人間としてのふれあいの叙述も、やや単調で公式的である。概して言えば、若い著者が運動の経験を重ねる中で、しだいに精神的にも成

長してゆく様が、生々としていないのである。社会運動家の自伝や回想録の中にも、これに成功している著作を我々は知っている。著者と同じ共産党員のそれとしても、例えば河上肇著『自叙伝』（岩波文庫）や伊藤憲一著『解放戦士別伝』（医療図書出版社）をあけることができる。本書が、自伝のみならず運動史の叙述をも目的としているとしても、これは本書の欠点というべきであろう。

本書の第二の特徴は、著者が地方を中心に活動した中堅活動家であったことから生じている。著者も中央の舞台に登場しなかったわけではない。戦前は前述のように日本労働組合評議会の中央委員であったし、戦後は第一回参議院選挙に三年議員として岡山地区から選出されている。しかし、大半は岡山と神戸を中心に地方幹部として活動したのである。

このため、自伝的運動史である本書は、必然的に、地方における運動に多くのページをさくことになっている。岡山労働組合の設立、岡山労働学校の創立、藤田農場争議の支援、徳島県撫養塩田争議の支援、神戸の工代会議運動と共産党の組織活動等々、多くの地方におけるトピックスが扱われている。

とりわけ、「岡山県で活動した革命家群像」と題した本書の終章は、本書の四分の一以上のページにあたる一〇〇ページをあて、大変に貴重である。あまり有名でなかった地方の運動家が回想され、ともすれば歴史の中にあらずもれてしまいがちな史実が掘りおこされている。

従来から、地方における社会運動史の叙述は、資料的な制約もあって、とかく等閑視されがちであった。本書が、地方社会運動史の叙述という面で、きわめて大きな成果をあげていることは、本書の第二の特徴といつてよいであろう。

本書に描かれている時代は、現代とは大きく異なっており、社会運動、革命運動のあり方も当時と現代とは異なっている。そしておそらくは、その運動自体を担っている活動家自体の資質も変化しているのであろう。日本の社会主義運動を切り拓き担ってきた著者の言葉は、現在の社会主義運動の一定の混乱期の中で、省察されるべき価値のあるものと思ふ。

(経済系院生 鷹取 健)

